台大日本語文研究第 15 期
2008 年 6 月，頁 89-120
2008-0428 收稿，2008-0707 通過刊登

《銀河鐵道之夜》中布魯嘉尼洛博士之人物設定
—由《天路歷程》之傳道者等角色作切入—

蔡宜靜*

摘要

幾乎所有先行研究皆傾向於將『銀河鐵道之夜』初期形三次稿中登場之布魯嘉尼洛博士此人物設定，視爲宮澤賢治本人在作品中現身說教此一解釋。雖然最終形（第四次稿）中此人物相關部分都被刪除，但是值得注意的是，本作品主人翁覺凡尼在透過人世間所沒有的特別旅程獲得精神與宗教上成長的歷程，此寫作前提架構是沒有更改的。

筆者之前曾經援用拜揚《天路歷程》的描寫，針對《銀河鐵道之夜》中基督教教徒的角色與發言等部分作對照檢討。結果顯示船難青年和同行姐弟的設定乃是受此基督教文學作品啓發而來。本論文主要承續前述論文的比較手法，將布魯嘉尼洛博士與《天路歷程》中傳道者等教示者角色作對照分析。就考察結論而言:以上部分的書寫設定，乃是比擬《天路歷程》的場面描寫而來。透過兩部作品的比較研究方法，不僅爲《銀河鐵道之夜》中布魯嘉尼洛博士相關部分，如'大提琴般的聲音'等抽象設定，提出切入分析解讀的方式；在詮釋賢治於四次改寫過程的關連性上，亦可提示不同角度理解的觀點。

關鍵詞：《銀河鐵道之夜》、初期形、布魯嘉尼洛博士、《天路歷程》、傳道者等角色設定

* 立德大學應用日語學系助理教授

Dr. Bulganiro in *Night of the Milky Way Railway* —Compared with The Preacher in *The Pilgrim Progress's Complete*—

Tsai, Yi-ching*

Abstract

Almost the early researches paying attention to the character setting of Dr. Bulganiro in *Night of the Milky Way Railway* consider Miyazawa Kenji explained his thought through this role. Although the related creation about Dr. Bulganiro was deleted in the final edition, however, we must not forget that the story assumption of the hero's growth under the description of religious literature had not been changed at all.

I had applied the description of *The Pilgrim's Progress's Complete* to examine the creation of Christians and the conversations in *Night of the Milky Way Railway* before. Consequently, the setting of the shipwrecked young people as Christians in the initial edition was obviously affected by the Christianity literature. In this thesis, I will apply the same comparison technique to analyze how Dr. Bulganiro and the roles of The Preacher etc. in *The Pilgrim's Progress's Complete* contrast to each other. In conclusion, the descriptions related to Dr. Bulganiro are previously following the drawings of *The Pilgrim's Progress's Complete*. Through the comparison of two works, we not only establish an analyzing way for the abstract descriptions such as ‘voice like cello’ in the initial edition,

* Assistant Professor of Applied Japanese Department, Leader University

but also give out a different reading way about Kenji’s writing method within the four-time rewriting process.

Key words: *Night of the Milky Way Railway*, the early edition, Dr. Bulganiro, *The Pilgrim Progress's Complete*, The Preacher etc.

『銀河鉄道の夜』のブルカニロ博士の人物設定
—『天路歴程』の伝道者などの役割を介して—

蔡宜静*

要旨

『銀河鉄道の夜』初期形の三回稿に登場するブルカニロ博士について、先行研究では、もっぱら賢治自身の投影と見なし、賢治の宗教上の所信を代弁する存在と解釈している。最終形（四次稿）に至って、ブルカニロ博士に関連する描写自体は削除されたが、主人公・ジョバンニがこの世ならぬ旅を通じて精神的、かつ宗教的に成長していく姿を描くというこの作品の骨組み自体には何らの変化も見られない。この点を、われわれは看過すべきではなかろう。

筆者はさきに、バンヤン著『天路歴程』を導入し、『銀河鉄道の夜』における難破船上の青年一同の役柄や彼らの発言がこのキリスト教文学の精華に由来するものと見て対照研究し、その結果、『銀河鉄道の夜』が明らかに『天路歴程』からの影響を受けているということを究明した。本稿では筆者の先般の研究成果を踏まえ、同様の手法によって、ブルカニロ博士の役柄設定もまた、『天路歴程』における伝道者の人物像に負っているということを究明したい。その結論は、さきの研究と同様、ここでも賢治は、『天路歴程』に相当に負いつつ筆を進めていたことが明らかになった。かくて両作品の比較を通じ、「セロのやうな声」ほか、『銀河鉄道の夜』に見るブルカニロ博士関連の他の抽象的叙述についても新たな解読法を示すことができた。

* 立徳大学応用日本語系助理教授

のみならず、『銀河鉄道の夜』全四次稿にわたる加筆プロセスについても、従来とは異なる視座を提供できたものと考える。

キーワード：『銀河鉄道の夜』、初期形、ブルカニロ博士、『天路歴程』、伝道者などの役割設定

『銀河鉄道の夜』のブルカニロ博士の人物設定
―『天路歴程』の伝道者などの役割を介して―

蔡宜静

一、はじめに

『銀河鉄道の夜』（以下、往々『銀河』と略称）は 1922 年頃に書き出され、1933 年まで三度にわたる改稿が行われた。このうち、一次、二次、三次稿を「初期形」とし、四次稿を「最終形」とする。前三稿にはブルカニロ博士という人物が登場し、その不思議な力のおかげで主人公・ジョバンニは銀河鉄道の旅をするという設定がなされている。ところが、最終稿に至って、この役柄は削除され、その代わりに「午后の授業」、「活版所」、「家」の三章が挿入された。その結果、この物語は、あくまでも主人公・ジョバンニの夢物語という形式に収斂されたのである。[1]こうしてみると、「初期形」から「最終形」への変化において最も重要な問題となるのは、ブルカニロ博士の消滅となろう。

先行研究では多くブルカニロ博士とジョバンニとが師弟のような関係にあることに注目し、賢治が農学校教諭であり、かつは羅須地人協会の指導者であったという経歴を根拠として、ブルカニロ博士の人物像と直結させている。その例はあまりに多く、ここでは逐一取り上げない。[2]また、この人物がジョバンニに語った宇宙観などを

---

1 入沢康夫・天沢退二郎「討議銀河鉄道の「時」ふたたび『銀河鉄道の夜』とは何か」『ユリイカ』青土社（1973.9）を参照。

2 たとえば、吉本隆明は三次稿に挿入されたブルカニロ博士がジョバンニに示した幻影に注目し、「「ブルカニロ博士」は宮沢賢治自身であるとともに、宮沢的にかんがえられた〈如来〉にほかならなかった」と解釈している（「宮沢賢治」『悲劇の解読』筑摩書房（1979.12）。1926 年、賢治はそれまで四年四ヶ月勤務した花巻農学校を退職し、農民活動に携わった。そして、近所の児童を相手に自作の童話会を開催し、また、農民の生活を向上させるべく、「稲作施肥計算資料」と題した調査表を多数設計し、その調査表の最後に「何べんも何べんもご相談になって直してからお持ちください」と書いている（「羅須地人協会関係稿」『校本宮沢賢治全集 第 12（上）巻』筑摩書房（1976、5）P.176。『銀河』初期形の改稿時点と考え合わせると、ブルカニロ博士の役割はやはり、賢治のその時点での思想を代弁し、自己の分身として作り上げ

賢治の宗教思想の文学的表現と見なす先行研究も数多い。その代表例として磯貝英夫、[3]および斎藤純[4]の研究を挙げることができよう。これら見解のいずれもがそれなりに正当であることに、筆者は決して異を唱えるものではない。

『銀河』前三稿では、程度の差こそあれ、ブルカニロ博士に対しては、さながら人生相談の導師然とした役作りがなされている。[5]賢治は死の直前に至るまで、終始農民たちの良き相談相手であったことからして、ここには確かに賢治の実生活が反映されていよう。しかしながら、ここで問題となるのは、ブルカニロ博士からの「お前は夢の中で決心したとほりまっすぐに進んで行くがいい」という指示に対し、ジョバンニが「僕きっとまっすぐに進みます」(一次稿)と答えていることである。ブルカニロ博士が指示し、ジョバンニも呼応した「まっすぐ」という言葉には、明らかに強い方向性が認められ、ジョバンニが何らかの目的地を一心に目指していることが示されている。「まっすぐ(な道)」の反対語は「曲がり道」であるが、周知のごとく、両者ともに宗教的、道徳的な意味合いも濃厚に帯びている。賢治はやはり、この「まっすぐ」という言葉に、そうした

たものと考えられよう。傍証として、ブルカニロ博士がジョバンニに語った「これから何でもいつでも私のとこへ相談においでなさい」という言葉が、賢治自身の「調査表」に見る言葉(上述)を強く彷彿とさせる点を挙げたい。

3 磯貝英夫は、ブルカニロ関連場面が削除された理由を、晩年の賢治が周囲へ『法華経』への帰依を強要しなくなったことと関連づけている。磯貝英夫「銀河鉄道の夜　賢治童話の〈解析〉改稿の周辺」『国文学解釈と教材の研究』至文堂(1982.2)を参照。磯貝はブルカニロ博士の説教内容を、「賢治生涯の思弁的テーマ」と説明し、賢治が最終形において「苦難な菩薩道に進む少年に、たとえ一時の猶予としても、幸福のおくりものをおくりたかった」と解釈している。

4 斎藤純は、同様にしてその理由を賢治の創作方法の円熟と関連付けている。斎藤純「銀河鉄道の夜」の物語としての構造―初期形から最終形へのダイナミズム―」『「銀河鉄道の夜」の物語としての構造』洋々社(1994.7)を参照。斎藤は賢治がブルカニロ博士の「人工的実験」を打破することによって、「銀河鉄道の夢、現実空間への通路を導き、現実と共鳴共振させ、逆に現実の方から壮大にして豊饒なる銀河鉄道の旅の真実性を確かなものにしようとした」と解釈している。

5 初次稿の最後では、ブルカニロ博士が姿を現し、実験の内容をジョバンニに説明したうえ、「これから何でもいつでも私のとこへ相談においでなさい」と述べている。この描写は三稿を通じて全く変更されていない。賢治がブルカニロ博士に人生相談のカウンセラーという役柄を与えていることが、ここからうかがい知られよう。

意味合いを持たせているのではないだろうか。そして、ジョバンニがブルカニロ博士の話を聞き入れるや、博士は褒美として「二枚の金貨」(一次稿)を与えているのであるが、そこに込められた賢治の創作上の意図は、現在に至るまで明らかされていない。以上いくつかの疑問点を視野に入れると、単に賢治の伝記的な事実を参照し根拠づけるだけでは解明し得ない部分がなお多く存在することに、誰しも気づかざるを得まい。

さて、三次稿では、ブルカニロ博士の分身と見なすべき「黒い大きな帽子をかぶった青白い顔の瘠せた大人」という人物が挿入され、その解説により、ジョバンニが銀河鉄道の旅で遭遇したあらゆる風景や出来事が、彼自身の施した「実験」であることが明らかにされる。[6]とくに三次稿では、「実験でちゃんとほんたうの考とうその考とを分けてしまへばその実験の方法さへきまればもう信仰も化学と同じやうになる」という文も加筆され、ここに本作品を貫くテーマ「信仰と(化学をも含めた)科学の一致を証明すること」が明らかにされたのである。すなわち賢治は、この「学者」に「大きな一冊の本をも」たせ、「紀元前二千二百年」と「紀元前一千年」の「地理と歴史」の話を加筆し、ジョバンニに物事が必ず移り変わるものだ(=諸行無常)という、仏教的な道理を悟らしめるのである。従来の研究では、賢治がこの作品に自己の信奉する『法華経』に基づく宇宙観・如来観を盛り込んだとする根拠を、三次稿で加筆されたこの一段に置くものがほとんどであった。しかしながら、賢治がなぜことさらこの一段を書き加えなければならなかったのか。この点に関して、いまだ精緻に解明した先行研究を見かけない。

このほか、上田哲はブルカニロ博士が生み出した銀河鉄道の幻影に関して、賢治の手帳[7]と創作メモ[8]に書き記された「異空間」とい

---

6 注 1 参照。全三次四稿にわたる改稿の経緯は、入沢や天沢などのすぐれた研究者の考察によって、現在ではほぼ明らかにされている。

7 『校本宮沢賢治全集 第 12(上)巻』筑摩書房(1975.12)の「兄妹像手帳」P.140 には、「わがうち秘めし/異事の数、/異空間の/断片」と書かれた箇所がある。また、同じく手帳 P.141 に、「唯物論二与シ得ザル諸点/一、唯物論要ハ人類ノ感官ニヨリテ/立ツ。人類ノ感官ノミ/ヨク実相ヲ得ルト云ヒ

う言葉に着目し、賢治が「実際に経験した神秘主義的宗教体験」がここに生かされたと解釈している。[9]また、桑原啓善はこれを賢治の「霊視能力・霊聴」に由来するものと説明している。[10]遺憾ながら筆者は、こうした論点の可否を論ずる力量を有しない。ただ、上記両氏が日常生活の「三次空間」とは異なる、「不完全な幻想第四次の銀河鉄道」(二次稿)という空間を、幻視・幻影の具現と結び付けていることに関して、いちおうの敬意を表したい。桑原はまた、初稿に描かれたブルカニロの「セロのやうな声」、「老人らしい声」について、これをいわゆる「ソクラテスにおけるダイモン(指導霊)」(ソクラテスを導いた神秘な声とされる)の声に喩えている。筆者はこれからも深い示唆を得た。ただ、残念ながら、桑原のこの指摘は、詳細な考証を伴わない、単なる感想にとどまっている。

こうしてみると、先行研究のいずれもが、もっぱら賢治の伝記研究に立脚するばかりであり、初期形から最終形までの改稿の具体的プロセスを追った例を見ないのである。そこで筆者は、1.ブルカニロ博士とジョバンニの師弟のような関係、2.「二枚の金貨」の褒美が意味するもの、3.「学者」による「地理と歴史」の解説、4.ブルカニロ博士の仕掛けた〈幻視・幻影〉とその関連場面、5.「セロの

得ズ。二、異空間ニ関スル資料」と書かれた部分がある。これら二箇所の記述から、賢治が「異空間」へ寄せた関心の大きさが窺われよう。

8 注7参照。口語詩[東の雲ははやくも蜜のいろに燃え]の下書稿の裏にしたためられたメモ(P.612所収)には、「序／科学に威嚇されたる信仰、／本述作の目安、著書、異構成－異単元／一、異空間の実在　天と餓鬼、分子－原子－電子／真空／幻想及夢と実在、／二、菩薩仏並に諸他八界依正の実在／内省及実行による証明／三、心的因果法則の実在／唯有因縁／四、新信行の確立」と書かれた箇所がある。これらの文言は『銀河鉄道の夜』初期形の構想やブルカニロ博士の役柄創出を示唆しているばかりでなく、賢治が常に「異空間」について思いを馳せていたことも明示していよう。

9 上田哲「『銀河鉄道の夜』―賢治の異空間体験―」『作品論宮沢賢治』双文社(1984.7)を参照。上田は、賢治が「他界(異空間)の神秘体験」を有したため、この童話の創出に「自らの神秘体験を基底にした新しい宗教＝新信行の確立を企図していた」という彼の意図があると解釈している。

10 桑原啓善「異次元世界を描写してみせた『銀河鉄道の夜』」『宮沢賢治』国文社(1986.11)を参照。桑原は賢治の詩作品『春と修羅』には、「多くの幻聴や幻視が出てくる」と判じ、同様の幻視能力がこの作品の「四次元世界」にまつわる描写にも活かされており、その結果、全篇を通じて「幻視や幻聴がたくさん交じっている」と解釈している。

やうな声」の〈幻聴〉の設定、という合計五つの謎を解明したいと思う。賢治は三次稿まで重ね、苦心の末に相互に関係付けたこれら部分を、最終形において一気に削除し、物語の構造を大きく改変している。その営為が意味するものを、先行研究は不当に軽視してきたものと言わざるを得ないのである。

筆者はさきに、拙稿「『銀河鉄道の夜』のキリスト教徒の話に着目して－『天路歴程』との比較研究を介して」(2007・12)を発表した。ここでは、『銀河』初期形に見るキリスト教の「青年」一同にかかわる改稿部分に注目し、それらの描出が『天路歴程』(以下、往々『天路』と略称)というキリスト教文学の精華から深く大きな影響を受けていたかを究明した。[11]同様にして今回もまた、ブルカニロ博士の作中における役割と、彼にかかわる以上の五つの問題点を、『天路』との対照研究を導入することによって、脈絡づけたいと思う。かくてこそ、ブルカニロ博士に関する箇所が最終形において削除されなければならなかった必然性を説明することができ、かつは、ブルカニロ博士の役割をめぐる従来の議論に、新たな解釈方法を示すことができるのではないかと考える。上記拙稿に引き続き、宮川満夫の論文「三冊の天上への旅の本について―イーハトーヴォ物語と『ルータベイガ物語』、『天路歴程』の比較研究―」(1997・2)[12]を参照したい。以下、宮川論文を参照した場合には、前稿と同様、それに

[11] 詳しくは、『台湾日本語文学報 22』台湾日本語文学会を参照。筆者は、両作品の対応する箇所を 14 項目 37 箇条にわたって整理し、『銀河鉄道の夜』が『天路歴程』に負ったとおぼしい構想・題材を列挙している。『銀河鉄道の夜』におけるキリスト教の「青年」一同に関する描出は、その典型例である。

[12] 『静岡英和女学院短期大学紀要 第 29 号』(以下、「掲載号」と略称)P.251-279。宮川のこの論考は、『天路歴程』をその英語原文にまで立ち入って読み込んだうえ、同書の『銀河鉄道の夜』への影響を具体的に列挙した労作である。筆者もまた大いに参照させて頂いたが、さればとて、宮川の見解に尽く賛同する立場にはない。また、宮川とは専門を異にしているために、賛否を述べかねる点もままある。『銀河鉄道の夜』成立に大きな影響を与えた古今東西の文芸作品は、もとより決して一つに留まらないであろう。『天路』もまた、『聖書』の構成や表現にその多くを負っているから、極論すれば『銀河』の源流の一つに『聖書』を数えることも不可能ではあるまい。筆者はしかし、いくつか存在する『銀河』の重要な源流の一つとして『天路』を見るという立場をあくまでも維持したい。それは、重要な先行研究としてこの宮川論文が厳存し、極めて学術的、かつ平易に両者の影響関係を考察しているからである。

対する筆者の賛否もしくは保留を逐一明示したいと思う。

以下の諸章節では、『銀河』『天路』両作品の展開がどのように対応しているかについて考察し、『銀河』改稿に見る賢治の意図を検証したい。

二、ブルカニロ博士にかかわる部分の創出と『天路歴程』との比較

賢治が『天路』を受容した背景と、彼が読んだとおぼしい日本語訳に関しては、前稿ですでに検証した。[13]『天路』の中軸をなしているのは、主人公・基督信者[14]が伝道者の指示に従い、天の都・エルサレムを目指す旅の途上での出来事である。様々な苦難や試練（例：悪魔アポリオンの誘惑）の場面の合間に、様々な人物（釈義者、処女の謹慎、信心、仁愛、牧羊者等）が姿を現し、基督信者に正しい道と真の幸福についての道理を諭すという設定が、一番大きな特徴をなしている。これら寓意的な登場人物は、ブルカニロ博士の役柄創出に大きく関連しているのではないだろうか。前章章末に挙げた『銀河』初期形（初稿～三次稿）に見る五つの設定は、それぞれ『天路』における 1.傳道者と基督信者の師弟関係、2.アポリオンの「罪悪の賃銀」、3.美麗宮の書斎で処女の見せた「歴史本」、4.「不思議」な幻像を見せた釈義者の立場および『生命の水の川』の光景、5.「指導霊」のような「声」の描写、を彷彿とさせる。[15]

---

[13] 注 11 前掲の拙稿を参照。

[14] 戦後の日本語訳本では、いずれも英語原文の人名をそのままカタカナで「クリスチャン」と音写表記しており、現在ではこの名称がすっかり定着しているようである。ただ、賢治が依拠したとおぼしい池亨吉訳ほか戦前の日本語訳本では、対照的にいずれも「基督信者」と意訳している。本稿でもこの旧訳語に拠った。なお、主人公・基督信者以外の他の登場人物（例：伝道者、釈義者）についても、戦前戦後を通じ諸訳本間に相当の異同が認められるが、本稿では尽く池訳に拠った。

[15] 本稿では、『銀河』の展開を主とし、『天路』の内容を参照する方法を取る。なお、宮川論文では、これら五箇所のうち、3 と 4 について、その付表中で短く触れている以外には、何ら触れるところがない（本稿注 19、23 および 24 参照）。そもそも、全篇を通じて、ブルカニロ博士については何ら言及していないのである。また、4 については、たしかに『天路』からの直接的影響である旨指摘しているものの、それらがいずれもブルカニロ博士による壮大な実験の一環であることについては全く触れておらず、巨視的な観察に欠けていると言わざるを得ないのである。

次に、両者の構成上の共通・類似点についての概観を行いつつ、初期形三稿における上記 5 箇条の描出がどのように『天路』の詞章を踏まえつつ加筆されていったかについて考察したい。各次稿のブルカニロ博士にかかわる描写がいかに『天路』に見るそれに負っているかを実証できれば、『天路』が『銀河』初期形の成立に担った役割もまた自然と浮き彫りにされるからである。『銀河』初期形における『天路』の役割の大きさが明らかにされれば、賢治が『銀河』最終形確立に際し、いかに『天路』色から脱却すべく苦心を重ねたかということも同時に解明されよう。

（一）ブルカニロ博士とジョバンニの師弟のような関係

『銀河』初期形の結末では、カムパネルラが姿を消した後、ブルカニロ博士が登場し、ジョバンニを慰めるとされている。たとえば、ジョバンニはカムパネルラの姿が消えたことに気づくや、「はげしく胸をうって叫びました」（一次稿）、「力いっぱいはげしく胸をうって叫びました」（二次稿）といった行動を示した。やがてブルカニロ博士が登場するが、その様子は、一・二次両稿では、「遠くからあのブルカニロ博士の足あとの近づいて来るのをききました」、「遠くからあのブルカニロ博士の足あとのしづかに近づいて来る」と描かれている。三次稿に至って、ジョバンニの嘆き悲しむ姿が「力いっぱいはげしく胸をうって叫びそれからもう咽喉いっぱい泣きだしました」と、より激しさを増す形で書き換えられたのに対応するかのごとく、ブルカニロ博士登場に先んじて、「黒い大きな帽子をかぶった青白い顔の瘠せた大人」＝「学者」という人物が挿入され、この人物がジョバンニへ「おまへはいつたい何を泣いてゐるの」と慰めるよう設定されている。

また、三次稿以後に挿入されたこの「学者」（実はブルカニロ博士）は、銀河鉄道の旅が実はすべて自己の行った「実験」にすぎない旨、言明している。上述したとおり、これによって賢治の『銀河』創作の趣旨が明らかにされたのである。ただ、ブルカニロ博士が悲しみに沈むジョバンニを励まし、ジョバンニが博士の教示のままに「ま

っすぐ」に進むことを誓い、かつは実行する、という設定は、一次稿以来、まったく動かされてはいない。この点にこそ、賢治がブルカニロ博士とジョバンニの人物像を、師弟の関係として描き上げようと当初から意図していたことが窺われよう。

師弟のような間柄にある二人が、この世ならぬ世界を旅するという設定自体は、『神曲』など世界の他の文学作品にもしばしば見受けられるが、筆者が敢えて『天路』に着目した理由は、伝道者と基督信者の関係が、『銀河』に見るブルカニロ博士とジョバンニのそれに非常に類似しているばかりでなく、人物の動きや会話にまつわる描写もすこぶる暗合しているからである。

まず、『天路』第一程では、いかに前途へ踏み出すべきかなお迷う基督信者の次のような自問から始まる。彼は「潸然と打ち泣きしが、さては最と耐へ難くなり増りて、さも悲しげなる声を放ち、『ああ我れ如何にせば可からん』、と叫」んでいる。街頭で自分の迷いを叫び立てているのである。ここに見る基督信者の「ああ我れ如何にせば可からん」という言葉は、『銀河』三次稿で挿入されたジョバンニの言葉「ぼくはそのひとのさいはひのためにいつたいどうしたらいいのだろう」を彷彿とさせよう。また、「打ち泣」く基督信者の前に、伝道者が「出で来りて彼れに近づき、『如何なれば卿は斯く泣き叫ばるるや』、と尋ぬ」つつ登場する。伝道者が登場する状況と、基督信者に語りかける姿はともに、ブルカニロ博士が「しづかに近づいて来る」ありさまや、「学者」がジョバンニへ「おまへはいつたい何を泣いてゐるの」と語りかける様子を彷彿とさせよう。

さらに、基督信者の苦境を知った伝道者が、「最と広き野原の彼方を指し示し、『其の光りを心あてに側目も振らず、一向彼方に進み行かば、やがて其の門を見るなるべし』」と教示している。この場面は、ブルカニロ博士がジョバンニへ「まっすぐに進んで行くがいい」と教示する姿を想起させよう。賢治がなぜことさら「まっすぐ」という方向を提示したのかについては、『天路』に見る伝道者の「側目も振らず、一向彼方に進み行」くようにという教示から来たものと見

れば、自然に納得できるのではないだろうか。そればかりでなく、『天路』ではさらに、基督信者が伝道者からの教示のままに、「後ろの方は見向きもやらず、愈よ曠野の真中さして馳せ出でた」としている。これは『銀河』でジョバンニが「まっすぐに走つて丘をおり」（一次稿）たとする描写に継承されているのではないだろうか。

加えて、ブルカニロ博士からの教示を拝するジョバンニの態度には絶対服従的な色彩が強く漂っている。これまた『天路』で、無事終わるかどうかもおぼつかない旅をなお躊躇する基督信者を伝道者が厳しく訓戒し、基督信者が迷わず進むことを誓うという場面から想を得ていよう。すなわち伝道者は、基督信者に対し、「今卿に我が語り聞かす事どもを一入心して聴かれよかし」、「必らず必らず用心して、再たび道より離るべからず」と厳しくも懇切に諭したのに対し、基督信者は「義しき道を捨つるに至りしを甚く恥らひ、さも悲しげに声を放ちて泣き出でたり」と痛省し、旅を続けるべく、「元の道に立ち返へらんと支度」している。

ここで注視すべきは、『天路』にいう「道より離るべからず」が、『銀河』にいう「まっすぐに進んで行くがいい」に与えた暗示である。ジョバンニはブルカニロ博士と相識ってからさして時間を経過していないにもかかわらず、極めて従順に、かつはあっさりと、その教示を遵奉している。両作品の主人公はともに、人生の道にさまよった際、それぞれ良き導師を得て苦境を脱しているのである。賢治が『天路』における「伝道者、基督信者を訓戒す」の段を下敷きとしてこの場面を描き上げたと見れば、ジョバンニがかくまでブルカニロ博士に素直に信服随従したのかも理解できよう。

さて、『天路』では、伝道者と基督信者との出会いが作品の冒頭に描かれているのに対し、『銀河』では、一、二次稿にあっては、ブルカニロ博士とジョバンニの出会いが作品の最後に設定されている。恐らく賢治は一、二次稿においてはまだ、自己が『天路』から受けた影響をぼかそうとする意思を少なからずいだいており、『天路』の伝道者をモデルとしたブルカニロ博士の登場場面を、意図的に作品

の最後へ置いたのではないだろうか。ところが、三次稿に至るや、賢治はブルカニロ博士の関連場面へ大幅に筆を加え、かつ、ブルカニロ博士の登場をも作品の冒頭へと移している。その理由について筆者は、賢治が『天路』に見る師弟関係の重さやその登場過程にはやはり採るべきものありと感じたため、と見たい。三次稿で新たに挿入された「天気輪の柱」の章では、ジョバンニがふと空を見上げたとき、「そこは博士の云つたやうな、がらんとした冷たいとこだとは思はれませんでした」とする一段があり、ジョバンニが出会ってまもないブルカニロ博士の存在を、全面的傾倒には依然至らないまでも、既に相当に意識していることが示唆されている。

（二）「二枚の金貨」の褒美が意味するもの

『銀河』初期形が『天路』から大きな影響を受けていることは、ブルカニロ博士がジョバンニに与えた「二枚の金貨」という設定からも証されよう。ジョバンニがブルカニロ博士と別れて丘を降りると、ポケットの中には「大きな二枚の金貨」があるのに気づいた、と書かれている（一、二次稿）。この「金貨」は明らかに、自己の教えを受け容れ、「ほんたうの幸福を求め」ようと志したジョバンニに対し、ブルカニロ博士が褒美として与えたものだと知られよう。貧しい少年の願いを、力ある者が助成する、という物語の構造は、三次稿の冒頭部分に挿入された「ケンタウル祭の夜」[16]の章に見るジョバンニの独白からもいっそう明らかにされている。

> 今日、銀貨が一枚さへあったら、どこからでもコンデンスミルクを買って帰るんだけれど。ああ、ぼくはどんなにお金がほしいだらう。青い苹果だってもうできてゐるんだ。カムパネルラなんか、ほんたうにいいなあ。今日だって、銀貨を二枚も、運動場で弾いたりしてゐた。

[16] 初期形である一次、二次稿までは、主人公・ジョバンニがすでに銀河鉄道の旅に出かけたという内容で展開されている。ところが、同じく初期形ではあっても、三次稿に至るや、主人公・ジョバンニの現実生活を描いた「ケンタウル祭の夜」、「天気輪の柱」の二章、および彼が銀河鉄道に乗るに至った経緯と旅の最初の情景を描く「銀河ステーション」、「北十字とプリオシン海岸」、「鳥を捕る人」の三章も挿入されている。

ジョバンニの貧しさと、貧しさゆえの富める友への禁じがたい嫉妬が、この一段の挿入によって一層強調されている。「金貨」は、カムパネルラが遊び道具がわりにしていた「銀貨」を遥かに上回る価値を有する。筆者がここで問いかけたいのは、賢治はなぜジョバンニが友を羨む場面を三次稿になって初めて挿入したのかということである。この加筆部分に潜む賢治の構想を理解するには、『天路』に見えるアポリオンの「罪悪の賃銀」の段との対照が要請されよう。

すなわち、『天路』第四程では、基督信者が旅の途中、悪魔のアポリオンと出会い、彼から自己の臣従となるよう誘惑される。これに対し、基督信者は敢然と拒絶し、「汝の与ふる賃銀にては誰れ人も其の生命を支え難し。そは（筆者注:『新約聖書』ロマ書 6 章 23 節に）『罪悪の賃銀は死なり』とあればなり」と答えている。アポリオンが金銭の力で基督信者を屈せしめようとしていたことが知られよう。この話に引き続いて、基督信者は悪魔の誘惑を拒絶する理由を、「我は汝よりも遥かに彼の君を好むなり。其の仕事、その賃銀、その臣僕、その治め方、其の朋輩、また其の国、すべて此の君の方遥かに勝りてあるなり」とさらに詳述している。天国を目指す彼にとって、「彼の君」こそ唯一の帰依の対象なのであって、悪魔の与える「罪悪の賃銀」などよりも天上なる神の賜る「賃銀」を選ぶのだとする、直喩表現が用いられている。

『天路』のこの描写を見れば、賢治が『銀河』でブルカニロ博士にジョバンニへ「二枚の金貨」を与えるよう描いた意図がおのずと明らかにされよう。賢治が『銀河』初次稿を書き上げた当初は、『天路』に見る基督信者が神の賜る「賃銀」を断然選び取ったとする描写に強い感銘を覚え、まずこれをそのまま自己の作品中に転用したのであろう。ただ、賢治としては、自己の奉ずる日蓮信仰を宣伝せんとする意向もあったため、新たに「ほんたうの神さま」という表現を導入し、キリスト教の神と区別したのではないだろうか。

ところが、こうしたところでなお、『天路』受容の痕跡は、拭いがたい。そこで賢治は、三次稿に至って、まずジョバンニがカムパネ

ルラの手にした「銀貨」を羨むとする部分を加筆し、『天路』から移植した「金貨」と対をなさしめた。けれども、何らかの宗教的な功労に対し、上位者もしくは権威者が金品を与えるとするのでは、いかにも功利的に過ぎ、忘己利他を旨とする法華信仰を宣伝するうえで、いかにも不適切であろう。また、三次稿から四次稿までの改稿に六年ものブランクがあるが、この間、賢治自身も羅須地人協会の破綻や病気など大きな試練を経ていた。[17]この試練は同時に、彼の思想にかつてない大きな肉付けを促した。その結果、最終形たる四次稿に至って、「金貨」「銀貨」ともに削除し、新たに「活版所」の章が設けられた。賢治はそこに「白服を着た人がやっぱりだまって小さな銀貨を一つジョバンニに渡しました」とする場面を設けた。こうした改稿の結果、ジョバンニが日常生活のただなかで勤労に勤しむ姿が強調されたのに対し、ジョバンニの求道は、ごく小さな銀貨に象徴される極めて純粋なものとされたのであった。

（三）「学者」による「地理と歴史」の解説

上述したように、三次稿で新たに挿入された「学者」とは、ブルカニロ博士の分身であり、ジョバンニに信仰を科学的に証明する方法を教える人物とされている。彼は「水は酸素と水素からできてゐる」という「化学」の観点から水の構成要素を説明したうえ、以前の歴史の誤謬を説くことで、「ほんたうの神さま」を判別することの重要性をジョバンニに提示した。ところが、「化学」の話を持ち出したにもかかわらず、「学者」は話題を次のように転じているのである。

> これは地理と歴史の辞典だよ。この本のこの頁はね、紀元前二千二百年の地理と歴史が書いてある。よくごらん紀元前二千二百年のことでないよ。紀元前二千二百年のころにみんなが考へてゐた地理と歴史といふものが書いてある。だからこの頁一つ

[17] この点に関して、萬田務は「啓蒙家として農民を仮装する賢治と、みずからの芸術の主体である賢治との分裂」や「生死の境を彷徨うという体験（昭和六年）」を経たため、四次稿執筆のやむなきに至った、と指摘している（「宮沢賢治論」『卒業論文のための作家論と作品論 国文学解釈と鑑賞別冊』至文堂（1995.1）。

> が一冊の地歴の本にあたるんだ。いいかい、そしてこの中に書いてあることは紀元前二千二百年ころにはたいてい本統だ。さがすと証拠もぞくぞく出てゐる。けれどもそれが少しどうかなと斯う考へだしてごらん、そら、それは次の頁だよ。紀元前一千年、だいぶ、地理も歴史も変はつてるだらう。このときには斯うなのだ。

「学者」はここで「万物流転」、より仏教的な表現を用いるならば「諸行無常」という簡明な宗教的道理を、「地理と歴史（に関する人々の知識の変遷）」に託し、真の信仰を判別するための方法としてジョバンニに示している。ただ、「ほんたうの神さま」を証するための方法は、賢治自身のメモを参照する限りでは、「科学に威嚇されたる信仰」、「菩薩仏並に諸他八界依正の実在／内省及実行による証明」[18]と書かれているに過ぎず、彼自身も相当の久しきにわたり探求模索しつつあったことが窺われる。にもかかわらず、賢治はなぜあえて『銀河』三次稿に至って、「学者」の語る「地理と歴史」の解説の一段を挿入したのか。この点に関して、筆者は賢治が『天路』に見る以下の不思議な光景を模したものと見たい。そこでは処女たちが美麗宮の書斎で基督信者に「有名なる歴史本」を示している。

すなわち、基督信者は第三程で美麗宮という場所に到着、処女たちから歓待される。処女たちは「此の家に秘蔵する珍奇しき品々をも見て行かれよとて、先づ書斎に伴なひ行き」、「此の書斎には其の他有名なる歴史本数多くある」としている。ここにこそ『銀河』における「学者」の見せたとされる「地理と歴史の辞典」の原型が認められよう。[19]また、「太古以来伝はれる記録の類ひ」について、「主の為し遂げられし其の事業や、其の為めに主が撰びて使はれし幾千の人の姓名や、また主が其の人々に与へて棲はしめらるる住処は、

---

[18] 注 8 参照。

[19] 宮川論文所掲の表 1「『銀河鉄道の夜』と『天路歴程』の比較対照」では第 10 項「歴史の本を読んで聞かせる」を立て、この箇条において筆者と同様の見解を示している。ただ、宮川は賢治がこの改変を行った意図については全く論じていない。掲載号 P.260。

げに物変はり星移るとも、絶えて朽ち破ぶるる者にあらざる、委しく書き留どめたる記録もありたり」、「旅人に取りては慰藉となり喜悦となるべき事」などと描写されている。『天路』に見るこれらの「歴史本」は、神を讃えるもの、もしくは、既に天国に入った篤信徒の事跡を綴るものと理解すべきであろう。これらの「歴史本」が「旅人に取りては慰藉となり喜悦となる」とされている点は、ジョバンニを慰めるべく姿を現した「学者」の立場に継承されてはいないだろうか。また、『天路』において「歴史本」が「物変はり星移る」ほどの長い時空を経過してきたとされている点は、これも『銀河』で学者がジョバンニに示した「辞典」が長い歳月の間に人々の脳裏にあった「地理も歴史も変わって」ゆく様子を叙述しているとされている点に受け継がれてはいないだろうか。

しかしながら、ここでさらに注意すべきは、『天路』で処女たちが基督信者に示したとされる「歴史本」が、「孰れ有名なる古今の出来事にて、或ひは予言あり、又箴言あり」という豊富かつ貴重な内容を有しているがゆえに、たとい外界が「物変はり星移る」とも、「絶えて朽ち破ぶるる者」ではないとされているという点である。この部分こそは、賢治がブルカニロ博士の、そして自己の分身でもある「学者」をして「地理と歴史」に託しつつ、真の信仰を判別するための方法をジョバンニへ教示した場面に直接的な示唆を与えていよう。筆者の見るところでは、『天路』に示された神を中心とする歴史上の「出来事」は、外界がいかに推移する（＝「物変はり星移る」）とも、それ自体には不動かつ不変の地位が与えられている。

一方、『銀河』では、「学者」の見せた「地理と歴史」は、むしろ時間の推移に従い、刻々と移り変われるという特質を帯びており、『天路』とは甚だ対照的である。ここで、「学者」が三次稿に至ってはじめて挿入されたという点をも考え合わせると、賢治は『天路』を下敷きとしつつも、これに正反対の改変を施したと見るべきではないだろうか。言い換えれば、賢治は「学者」（＝ブルカニロ博士＝自己）に「実験の方法」を明示させ、「地理と歴史」が動的な原理で

あることを強調させることによって、『天路』に代表される他宗教（具体的にはキリスト教）の時間論、歴史観の無理や誤りを暗示し、かつ、自宗教（法華信仰）に見る豊かな科学性、合理性をも暗示しようとしたのではないだろうか。ただし、こうした営為が折からの賢治の病的心態のなせるわざであったことを見落としてはなるまい。[20]

（四）ブルカニロ博士の仕掛けた〈幻視・幻影〉とその関連場面

「学者」は「地理と歴史」の説明をしてから、「指を一本あげてしづかにそれをおろし」、やがてジョバンニへ以下の光景を示している。

> いきなりジョバンニは自分といふものがじぶんの考といふものが、汽車やその学者や天の川やみんないっしょにぽかっと光ってしいんとなくなってぽかっとともってまたなくなってそしてその一つがぽかっとともるとあらゆる広い世界ががらんとひらけあらゆる歴史がそなはりすっと消えるともうがらんとしたただもうそれっきりになってしまふ。

これを読むと、銀河鉄道の旅の景色、ジョバンニがここまで出会ってきた複数の人物、さらにはそもそも「学者」自身までもがことごとく、ブルカニロ博士＝宮沢賢治の仕掛けた〈幻視・幻影〉であったということが知られよう。いわば一種の種明かし的な場面であると言える。これと呼応する形で、同じく三次稿では「銀河ステーション」の章が挿入され、そこではジョバンニが「どこかずうっと遠くで、なにかが大へんよろこんで、手を拍ったといふやうな気がしました」と描かれている。後者が意味するものは、ブルカニロ博士が幻術ショーの序幕の合図を送ったということであろう。

ただ、ここに至ってもなお、賢治が三次稿に至ってことさら「学者」を登場させ、しかも彼をしてジョバンニに「地理と歴史の辞典」

---

[20] 福島章は賢治のこの時期の旺盛な創造力を精神医学者の立場から分析している（「文学者の病跡」『岩波講座精神の科学 9 創造性』岩波書店（1984.1））。福島は賢治が帰依した「法華経は動的で生命的な世界像を提示し、時間的にも空間的にも、無限の宇宙の中に永遠に続く巨大な生命（エネルギー）の存在を教え」ようとしたものと見る。そのうえで、同経に横溢するこうした思想が賢治に軽うつ状態をもたらし、その結果、自己の信仰と思想が『銀河』初期形により一層打ち出されるに至ったと見ている。筆者もまた福島の見解に賛意を表したい。

などの幻像を示させたのか、その意図は一向に明らかにされていない。また、「ブルカニロ博士」と書けばすむものを、なぜことさら「学者」とし、一読しただけでは読者によっては、両者をまったく別人と誤認するような描写を敢えてしたのか、この点も解明の要があろう。こうした疑問点のヒントは、これらの描写が範と仰いだ『天路』の中にこそ求めるべきではないだろうか。そこで、『天路』に眼を転じ、ブルカニロ博士と同じような役割を帯びた登場人物を探してみると、釈義者という名の先覚者に出会う。この人物は、複数の「不思議」な場面を基督信者に見せ、宗教的訓戒を垂れているのである。

ふたたび『銀河』三次稿に眼を転ずると、同稿で新たに挿入された「ケンタウル祭の夜」と「天気輪」の章で、ジョバンニが現実生活において自己の生い立ちに悩み、周囲の友達との人間関係にひびも生じていたことが知られる。賢治は明らかにことさらジョバンニのような、様々な人生の問題を抱え、人生の進路にまよう人間を選び出し、銀河鉄道の旅の景色によって彼を慰労しつつ、彼が「ほんたうの幸福」を探求し、「ほんたうの神さま」をいかに判別するかを真摯に考察するよう導いた。これこそは『銀河』三次稿特有の、それまでの二稿にない主旨だといえよう。これらの形而上的な課題の存在をジョバンニに気付かせるべく、ブルカニロ博士はジョバンニに旅の途上で様々な〈幻視・幻影〉を見せているが、それらは主に（1）乗客と交流する場面、および（2）自然の情景の二種に大別できよう。

（1）に関しては、たとえば、難破船の「青年」一同の創出も、ブルカニロ博士がジョバンニに示した〈幻視・幻影〉の一例と見なせよう。賢治は『銀河』二次稿で青年一同との出会いを加筆し、ジョバンニが「ほんたうの幸福」を探求し、「ほんたうの神さま」をいかに判別するかを真摯に考察するための契機を与えている。[21]

一方、（2）に関しては、その実例を銀河鉄道の旅の展開を追いつつ、かつは一、二次稿に拠りつつおおまかに列挙してみると、「森琴

[21] 注 11 前掲の拙稿を参照。

の宿」、「海豚」、「幾万といふ鳥の群」、「高原」の起伏、「インデアン」、「空の工兵大隊」、「蠍の火」の話などがあげられる。また、三次稿では、「北十字とプリオシン海岸」の章が比較的前方に挿入されており、全体的に見て旅の情景に一層多彩さが添えられている。

従来の解釈では、これらの旅の光景は、賢治自身の自然体験や星座関連の知識にもとづいて描かれたものされている。[22]もとよりそれ自体に何らの間違いはないが、ところどころに挿入されたジョバンニの感想と独白をも併せ読む限りでは、それら描写にはある程度まで、前出難破船の「青年」一同の目的地たる天国の光景に同じく、寓意的な意味合いが含まれているように考えられるのである。だとすれば、このような自然の風景もまた『天路』からの影響を受けているといえよう。ここでは該当箇所について一々考察する紙幅がないので、三次稿で新たに挿入された「プリオシン海岸」の場面にのみ注目しよう。「プリオシン海岸」でジョバンニは、もう一人の「学者らしい人」に出会う。この人物の役柄も、ブルカニロ博士のもう一人の分身とみなせ、『天路』で基督信者が出会う釈義者をモデルとしているものとおぼしい。

1.「不思議」な幻像を見せた釈義者の立場を介して

すなわち、基督信者は伝道者の指示に従い、天国を目指す過程で、処女たちばかりでなく、釈義者（第二程）や牧羊者（第八程）といった信仰の先覚者たちに出会い、自己の信仰を一層堅固なものとしてゆく。とりわけ釈義者は、都合六つの「不思議」な幻像を基督信者に見せ、彼に宗教的な真理を諭しており、この点、『銀河』でブルカニロ博士が果たす役割に甚だ通ずるものがある。たとえば、釈義者はまず「卿の益ともなるべき事を示すべし」と言いつつ、基督信者へ「人物の画像」、「二人の児童」や「絶望の人」といった、すこぶる寓意的な場面を示す。この構造たるや、ブルカニロ博士がジョ

[22] 『銀河鉄道の夜』の旅に出てくる銀河の光景を星座の知識にもとづいて考察した先行研究としては、斎藤文一の『宮沢賢治星の図誌』平凡社（1988.8）が挙げられる。

バンニにカムパネルラ、「青年」一同、「学者」などの人物に関する様々な幻像を示すという『銀河』の諸設定を彷彿とさせよう。とくに、『天路』における「人物の画像」に関する描写を、『銀河』に見る「学者」の風貌に関する描写と見比べてみると、賢治が明らかに『天路』に学んでいることが知られるのである。『天路』では、「人物の画像」について、「其の身は浮世に背向き、其の唇頭には真理の律法書き記され、手には二つと無き良き書物を持」つとされている。これはそのまま『天路』で「学者」の風貌を「やさしくわらって大きな一冊の本をもってゐました」としているのに継承されていよう。

『天路』のこの「人物の画像」は、「立ちて人々に教を諭す者に似たり」、「此の道筋の難渋なる所々にて、卿等を手引きし得さすべき唯一個の人なればなり」とも描かれており、基督信者が天国への旅の途上で最初に出会った伝道者と同一人物であることが明らかである。『天路』の作者・バンヤンは、釈義者が基督信者のよく知っている伝道者の「画像」をことさら彼基督信者に示すことによって、第一程で伝道者が基督信者に与えた「側目も振らず、一向彼方に進み行」けよという教示が正しかったということを、改めて強調せんとしたのであろう。いわば劇中劇のような、この重層的叙述法こそ、賢治が三次稿でブルカニロ博士とは明らかに同一人物である「学者」をことさら挿入した理由を説明するに足ろう。つまり賢治は、『天路』で熱誠あふれる伝道者の姿が釈義者の示した「画像」中に幻像として再度現れるという構造を模し、ブルカニロ博士がジョバンニへ、「学者」による「実験」の幻像を、それがはっきり幻像と分かる形で示したのではないだろうか。

『天路』では釈義者は基督信者に六つの幻像を示してのち、「目に見ゆる物は仮初にて、見えざる物は永久なり」と述べている。一方、『銀河』では、「学者」が「ぼくたちはぼくたちのからだだって考だって天の川だって汽車だって歴史だってたださう感じてゐるのなんだから、そらごらん、ぼくといっしょにすこしこころもちをしづかにしてごらん。いいか」と語ってのち、以上の対象物をすべてジョ

バンニの面前で消し去っている。前者は明らかに後者に影響を与えていよう。また、『天路』の釈義者は上記の言葉に続けて「凡て見聞きしつる事どもを、卿は能く心に味はひたるにや」と述べているが、この言葉は『銀河』の「学者」が語っている「こころもちをしづかにしてごらん」、「おまへの実験はこのきれぎれの考のはじめから終りすべてにわたるやうでなければいけない」という言葉の下地をなしていよう。

さて、釈義者は基督信者に対し、さきに示した六つの幻像がかりそめのものであり、すべてのものに対し心眼を持つよう教示している。この場面は、同じく『銀河』三次稿で新たに挿入された「プリオシン海岸」にも影響を与えている。「プリオシン海岸」では、ジョバンニはもう一人の「学者らしい人」に出会う。この人物は、海辺で化石を探している。ジョバンニが何を探しているのか尋ねると、彼は「ここは厚い立派な地層で、百二十万年ぐらゐ前にできたといふ証拠もいろいろあがるけれども、ぼくらとちがったやつからみてもやっぱりこんな地層に見えるかどうか、あるひは風か水やがらんとした空かに見えやしないかといふことなのだ」と答えている。確乎として彼とジョバンニの眼前に存在する「地層」が、実は「風か水やがらんとした空かに見えやしないか」というのである。こうした考え方たるや、『銀河』の文脈からだけでは到底解読できない。しかしながら、上に引いた『天路』の釈義者の言葉「目に見ゆる物は仮初にて」と照らし合わせれば、「学者らしい人」の言葉の意味も容易に理解できよう。つまり、この「プリオシン海岸」の場面そのものを一つの幻像と見なせば、この「学者らしい人」も「一冊の本をも」つ「学者」に同じく、ブルカニロ博士の仕掛けた幻像の一つにすぎないのである。

ともあれ、賢治はまずこの「学者らしい人」の話で伏線を引き、次いで「一冊の本をも」つ「学者」の説明に至って、銀河鉄道の旅が実は壮大な「実験」であったことを明かしている。この叙述構造自体が、『天路』の釈義者の段から示唆を得ていよう。賢治はしかし、

いかにも理科実験然とした描写を加味しており、すなわち、今ふうの講義の形に書き直し、こうすることで、『天路』の描写に相当の変容を加えている。『天路』では釈義者はさらに、「げに是等の事共は、之れより進み行く道筋にて、必らず卿を鼓舞ます鞭ともなるべければ、能くよく心に留め置かれよ」、「あゝ基督信者どのよ、願はくば訓慰師常に卿と共に在し、都に上る道すがら恙なく卿の手引」け、と基督信者を励ましている。釈義者のこうした言葉は、『銀河』にあっては、ブルカニロ博士がジョバンニを「お前はもう夢の鉄道の中でなしに本統(ママ)の世界の火やはげしい波の中を大股にまっすぐに歩いて行かなければいけない」と訓戒した言葉に大きく影響していよう。賢治は『天路』に見る伝道者および釈義者の役柄に感銘を受け、とりわけ彼らと基督信者との間の深い師弟関係に感銘を受け、彼ら先覚者の人物像を整合しつつ、ブルカニロ博士の人物像を作り上げていったと言えよう。

2.『生命の水の川』の光景を介して

「プリオシン海岸」の場面について引き続き考察を加えたい。ジョバンニの乗った列車が「白鳥停車場」という駅に到着すると、ジョバンニとカムパネルラはともに汽車を降り、「きれいな河原」を遊歩する。ジョバンニが「走ってその渚に行って、水に手をひたしました」のに対し、カムパネルラは、「不思議そうに立ちどまって、岩から黒い細長いさきの尖ったくるみの実のやうなものをひろひました」と描かれている。

この水遊びの情景と果実を拾う光景は、『天路』で基督信者が『生命の水の川』のほとりで休息するという場面から着想されていよう。『天路』第七程では、『生命の水の川』（別名：『エホバの川』）のほとりで、「今しも其の道筋は此の川岸に沿ひたることなれば、基督信者と其の同伴は最と楽しく此処を通」ると描かれている。この描写は、『銀河』における「プリオシン海岸」の段創出のきっかけをなしていよう。『天路』では、基督信者が『生命の水の川』のほとりで、「時には又流の水を掬び」、「其の元気を養なひけり」とされている。

こうした行動たるや、そのまま『銀河』の「プリオシン海岸」におけるジョバンニの行動を想起させよう。また、『天路』では、基督信者が数々の「病ひをも癒」す「種々の木の実」を拾ったとしている。この場面は、『銀河』の「プリオシン海岸」でジョバンニが「くるみの実」を拾ったとする描写に継承されていよう。[23]そして、注目すべきは、『天路』にいう「両人は野に伏して且つ眠り、目醒めては木の実を拾ひ、また清き流れの水を掬びては再び伏し憩ふ」とする場面が、『銀河』にあってはジョバンニらが「河原」で遊ぶ描写にほぼ忠実に継承されているという点である。[24]

では、賢治はなぜ三次稿に至ってはじめてこの「プリオシン海岸」の場面を加筆したのであろうか。恐らく三次稿執筆当時、賢治はジョバンニの現実生活の不遇ぶりについて加筆しており、さればこそ、『天路』に見える旅人が『生命の水の川』で癒され、健康状態が回復し、旅を続ける英気を養う、という場面には自作の物語の展開を円滑にさせる効果があると感じ、この部分を時あたかも執筆中の三次稿に取り入れたと考えられよう。両作品の主人公が同一の光景によって癒されてのち、再び類似した行動を示しているという点からも、筆者の上記の仮説は立証されよう。すなわち、『天路』では、基督信者と其の同伴者が「難なく此の峰をも登り」、「さも軽やかに又速やかに彼方を指して登り行けり、行く行くも安らかに彼の河を渡」ったとされている。一方、『銀河』では、ジョバンニとカムパネルラは、「一生けん命汽車におくれないやうに走りました。そしてほんたうに、風のやうに走れたのである。息も切れず膝もあつくなりませ

[23] 宮川論文所掲の表 1「『銀河鉄道の夜』と『天路歴程』の比較対照」では第 16 項「河に沿って自由に食べることのできる果物がある」を立て、この箇条において筆者と同様の見解を示している。ただ、宮川は四次稿の冒頭に書き加えた「銀河」の部分だけを対照的に引用するにとどまっており、「プリオシン海岸」の描写について全く触れていない。掲載号 P.261。

[24] 宮川論文所掲の表 1「『銀河鉄道の夜』と『天路歴程』の比較対照」では第 17 項「天上の河は『水晶の河』」を立て、かつ、『天路』関連章節の英語原文を示したが、宮川が引用した部分と筆者が取り上げた箇所は異なっており、かつ、宮川はもっぱら、河の水の清らかさに関する『銀河』の描写がいかばかり大きく『天路』からの影響を受けているかという点にのみ注視している。掲載号 P.262。

んでした。こんなにしてかけるなら、もう世界中だってかけれると、ジョバンニは思ひました」とされている。いずれも清らかな川の水を飲んで元気を回復した結果である。

（五）「セロのやうな声」などの〈幻聴〉の設定

ブルカニロ博士の仕掛けた〈幻視・幻影〉と対をなしているのは四次稿以外の三稿に挿入されたいくつかの〈幻聴〉である。この〈幻聴〉は主に、銀河鉄道の旅の景色や原理への説明とジョバンニへの励まし、という二種類に大別できる。たとえば、まず『銀河』一次稿には、「『ええ、ええ、もうこの辺はひどい高原ですから。』うしろの方で誰かとしよりらしい人のいま眼がさめたといふ風ではきはき談してゐる声がしました」、「『え、もうこの辺から下りです。何せこんどは一ぺんにあの水面までおりて行くんですから容易ぢゃありません。この傾斜があるもんですから汽車は決して向ふからこっちへは来ないんです。そら、もうだんだん早くなったでせう。』さっきの老人らしい声が云ひました」とある。ここに見える「としよりらしい人」、または「老人らしい」声は、列車の進行に連れて景色が上下することを物理学的に説明するガイド的役割をなしている。[25]

次に、『銀河』二次稿では、「『もう帰りたくなったって。そんなにせかなくてもいい。まだ二分もたってゐない。まあ安心しておいで。いつでもその切符で帰れるから。』またあのセロのやうな声がどこかでしました」とある。その声を耳にしてジョバンニは、「気持がすっかりなほってまた叫び出したいくらゐ愉快になりました」という反応を示している。こちらでは、「セロのやうな声」は旅人の不安を沈める役割をなしていよう。

ところで、ジョバンニはどうしてこのような常ならぬ「声」による説明を何の抵抗もなく受け容れることができたのか。前掲した上

[25] なお、三次稿では、「セロのやうなごうごうした声がきこえて来ました」、「あのセロのやうな声が答へたのです」、「あのなつかしいセロの、しづかな声がしました」、「ききおぼえのある声が、ジョバンニの隣りにしました」といった描写が多数認められる。いずれもジョバンニが銀河鉄道の車窓から見た景色に感じた不思議さを説明する際の冒頭句である。

田と桑原の先行研究では、これらの〈声〉が〈幻聴〉と解釈している。両者ともに、一、二次稿までは〈声〉の出所がはっきりと描かれていなかったために、これを賢治自身の経験した「神秘主義的宗教体験」と関連づけている。[26]しかしながら、三次稿に至って挿入された「学者」の登場[27]により、幻聴のような「セロのやうな声」が実は「学者」＝「ブルカニロ博士」の仕掛けたものであったことが知られよう。こうした幻視さながらの場面をジョバンニへ見せた「学者」の役割は、実は『天路』に散見される「指導霊」の声を模していよう。

『天路』における「指導霊」のような声に関連する叙述を探ってみると、以下のようないくつかの描写が看取される――（1）第四程では、「たまたま向ふの方に行く人ありと覚しくて、『たとひ我れ死の蔭の谷を歩むとも禍害を恐れじ、なんぢ我れと共に在せばなり』、と云へるやう其の声ほのかに聞こえ」たので、基督信者は「心頻りに喜こ」んだとされる。（2）第七程では、「那処ともなく人の声ありて、『汝の行ける道なる大路に心を留めよ、返へれ其の道に立ち返へれ』、と云ひつつ二人を励ましたり」とある。（3）第九程では、有望が「忽ち天より声あり」、「其時また声あ」るのを聞いて、「主イエス、キリストを信ぜよ、さらば汝救はるべし」、「すべて我れに就る者は我れ必らず之れを棄てず」と教示され、「最と嬉しくて坐に感涙を催ふし」、「我が心は喜悦にて充ち、我が眼は涙にて満ち」たとされている。

これらの描写を見てみると、『銀河』初期形における「セロのやうな声」の淵源が明らかにされよう。進むべき道に悩む基督信者へ正しい方向を教示したり、不安で心細くなった基督信者に励ましを与える「其の声」は、彼が神への信仰心を堅固にし、天国へ入らんと

[26] 本稿注 9 および 10 参照。

[27] 「学者」はその登場に先立ち、次のような場面がある――「『おまへはいったい何を泣いてゐるの。ちょっとこっちをごらん。』いままでたびたび聞えたあのやさしいセロのやうな声がジョバンニのうしろから聞えました」。この一文は、以前に登場するすべての「声」が、実は「学者」の仕掛けたものであることを示唆していよう。

する志を保持すべく存在するもののようである。『天路』における「其の声」は、「たまたま向ふの方に行く人ありと覚しくて」、「其の声ほのかに聞こえたり」などと描かれているが、こうした描写は、『銀河』における「セロのやうな声」が「あのなつかしいセロの、しづかな声がしました」と描かれていることに、大きな下地を提供していよう。また、『天路』では「其の声」に接した基督信者が「心頻りに喜こびたり」、「我が心は喜悦にて充ち」たと描かれている。これは『銀河』では「セロのやうな声」を聞いたジョバンニが「気持がすっかりなほってまた叫び出したいくらゐ愉快にな」ったとされる描写に忠実に継承されているのではないだろうか。ただし、賢治はこの「セロのやうな声」を、『天路』に見るような励ましの声であると同時に、銀河鉄道の旅の景色や仕組を説明するガイド的なものでもあるとしており、この点に賢治なりの改変が認められよう。

以上の五か条にわたる比較対照から、賢治は『天路』の各旅程に登場する先覚者の人物像や関連場面を適宜抜き出し、初期形におけるブルカニロ博士関連場面を作り上げていったことが窺われよう。『天路』というキリスト教文学の精華が作中人物の言葉を借りて、誰にも分かるような形でキリスト教の教義を伝えているという点に、文学による宗教伝道に志していた賢治は、大きな感銘を受けたに違いない。だからこそ彼は、ブルカニロ博士のような役柄を創出し、それを『天路』における伝道者と釈義者の人物像と照合させつつ、改稿のたびに少しずつ自分なりの変容を加えていったのではないだろうか。

ところが、『銀河』最終形たる四次稿に至って、ブルカニロ博士は完全に削除された。彼に関する場面は相当量に達し、しかも互いに連動していたがゆえに、削除に伴う書き直しは相当な辛労を賢治に与えたものとおぼしいが、にもかかわらず賢治が上記の削除・改稿を敢えてしたのは、賢治が既に『法華経』信仰者としての自己を確立する段階に達しており、さればこそ自己の心血を注いだ作品『銀

河』にキリスト教色溢れる『天路』からの影響が依然横溢していることがやはり耐えられなくなったからではないだろうか。

三、おわりに

本稿では、『銀河』初期形に見えるブルカニロ博士関連場面を対象に、『天路』に登場する伝道者ら特徴ある人物像やいくつかの寓意的場面がそれに与えた影響を考察した。結論を言えば、ブルカニロ博士という役柄には、賢治の独創性があまり認められないのである。つまり、一、二次稿において賢治は『天路』に見える伝道者の風貌を模倣しつつ、ブルカニロ博士の人物像を造形したが、三次稿に至った、伝道者に加え釈義者の人物像をも加え、ブルカニロ博士の分身たる「学者」を描き上げている。

また、『天路』に見る悪魔の「罪悪の賃銀」の場面から着想を得て、ブルカニロ博士の指示を受けいれたジョバンニが、博士から「二枚の金貨」の褒美を与えられたとする場面を描き上げている。ただ、宗教的な求道が、金銭を含むいかなる報酬とも結びつくことを賢治自身が潔しとしなかったためか、最終形たる四次稿に至り、関連場面は挙げて削除されている。そして、三次稿で新たに挿入された「学者」（ブルカニロ博士の分身）がジョバンニへ「地理と歴史」を解説するという場面も、その構想の多くを『天路』に見る「処女たち、基督信者へ『歴史本』を示す」の段から示唆を得たものと考えられる。ただ、賢治は『天路』で歴史が不動不変のものとされていることには賛同せず、それがむしろ万物変化、諸行無常のただなかにあるとの見解を描き上げ、自己の独自性を保っている。

以上の考察から、ブルカニロ博士が仕掛けた〈幻視・幻影〉の方法とその関連場面、さらには「セロのやうな声」に代表される〈幻聴〉もまた、『天路』の関連場面を換骨奪胎したものと見られよう。『天路』では、主人公・基督信者が天国を目指す旅に出かけた際、釈義者、処女や牧羊者といった寓意的人物に出会い、これらの先覚者から様々な不思議な光景を示され、自己の信仰を堅固にしてゆく

ばかりでなく、いくつの試練の場面においても、「指導霊」の声から励ましを与えられる様子を描いている。筆者は今回、『天路』で釈義者が基督信者に「不思議」な幻像を見せるという場面と、基督信者が『生命の水の川』の場面で憩いを得るという場面を参照しつつ、なぜ賢治が『銀河』三次稿に至って新たに「学者」を挿入し、ジョバンニが彼から「地理と歴史の辞典」などの幻像を示された見せたかを考察した。その結果、「学者」がジョバンニに幻像を示すという場面自体がいわゆる劇中劇であり、しかもその原型が『天路』にあるということが解明された。また、『天路』で進むべき路に迷う基督信者に「其の声」が励ましの声を送るという設定が、『銀河』にあっては、ジョバンニが基督信者と同様の苦境に置かれた際に、「セロのやうな声」として現れ、ジョバンニを励ますという形で継承されているということも解明された。

賢治はかくまで『天路』に深く感銘し、『銀河』創作にその感動を活かしている。したがって、先行研究が『銀河』に散見されるさまざまな幻想的場面をもっぱら賢治の「神秘主義的宗教体験」とのみ関連付けてきたことは、今後は大いに検討されるべきであろう。『銀河』四次稿に至って、『天路』からの影響は外見上は相当に払拭された。しかしながら、文学を通じて自己の奉ずる宗教的信仰を宣揚するという『天路』の精神そのものは、賢治自身が終始バンヤン（『天路』著者）と同様宗教文学に志していたがゆえに、依然『銀河』のそこかしこに横溢していると言えよう。以上の考察によって、『銀河』初期形（一、二、三次稿）から最終形（四次稿）に至るまでの改稿のもつ意味について、本稿は新たな解釈を示すことができた、と筆者は考えている。

使用テキスト

本稿における『天路歴程』からの引用は原則として、池亨吉訳の『天路歴程完 The Pilgrim Progress’s Complete』（基督教書類会社、1904 年）に拠る。作品引用の際、漢字の表記は新字体に改め、仮名

遣いは歴史的仮名遣いに拠った。また、初期形三稿からの引用は、いずれも『新校本宮沢賢治全集第 10 巻』（筑摩書房、1995・9）に拠った。

参考文献

「単行本」

石内徹編（2001.4）『宮沢賢治『銀河鉄道の夜』作品論集』クレス出版
斎藤文一（1988.8）『宮沢賢治星の図誌』平凡社
佐藤泰正（1980.5）『別冊国文学宮沢賢治必携』学燈社
堀尾青史（1991.2）『年譜宮沢賢治伝』中央公論社
萬田務ほか（1995.1）『卒業論文のための作家論と作品論　国文学解釈と鑑賞別冊』至文堂
山内修（1989.9）『年表賢治読本宮沢賢治』河出書房新社
山内修（1990.9）『新文芸読本』河出書房新社
吉本隆明（1979.12）『悲劇の解読』筑摩書房

「論文」

磯貝英夫（1982.2）「銀河鉄道の夜―改稿の周辺」『国文学解釈と鑑賞』至文堂
入沢康夫・天沢退二郎（1973.9）「討議銀河鉄道の「時」ふたたび『銀河鉄道の夜』とは何か」『ユリイカ』青土社
上田哲（1984.7）「『銀河鉄道の夜』―賢治の異空間体験―」『作品論宮沢賢治』双文社
桑原啓善（1986.11）「異次元世界を描写してみせた『銀河鉄道の夜』」『宮沢賢治』国文社
斎藤純（1994.7）「「銀河鉄道の夜」物語としての構造－初期形から最終形へのダイナミズム－」『「銀河鉄道の夜」物語としての構造』洋々社
福島章（1984.1）「文学者の病跡」『岩波講座精神の科学 9 創造性』岩波書店
宮川満夫（1997.2）「三冊の天上への旅の本について―イーハトーヴォ物語と『ルータベイガ物語』、『天路歴程』の比較研究―」『静岡英和女学院短期大学紀要第 29 号』静岡英和女学院短期